

資料紹介

前島密、渡航記録の検証

—上野日誌との比較を中心に—

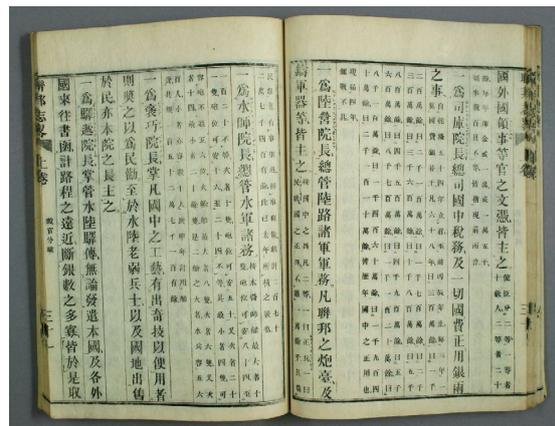
井村 恵美

1 はじめに

明治3（1871）年、前島密は新式郵便創業の建議をした時には、洋行の経験がなく、漢訳本『聯邦志略』【図1】などわずかな文献情報^①や渋沢栄一ら渡欧経験者からのヒアリングを元に立案した。そのため、建議からわずか10日後に発令された英国出張より、諸外国の近代郵便の状況を見聞した経験は、帰国後の前島の取り組みに多くの発見とアイデアを与えたことが手記から窺い知ることができる。中でも往路で利用した太平洋郵便蒸気船会社（Pacific Mail Steamship company. 以下、「太平洋郵船」^②）の船内郵便局のサービスに出会ったときのファーストインパクトはいかばかりだっただろう。

郵政博物館には前島密の洋行に関する自叙伝草稿などの関係資料は数点現存するが、いくつかの記録で往復路の航路、乗船した船名が異なるといった誤認が見受けられる。さらに、復路については先行研究があるものの、前島の洋行に関して俯瞰した検証はなく、そのため後発の関連書籍で日付の不一致が散見される。

そこで本稿では、前島の海外への渡航記録、特に往復路の横浜発着の日付に焦点を当て、上野景範^③の渡欧日誌を中心に、比較検証を行うこととした。



【図1】『聯邦志略』上・下巻、早稲田大学図書館所蔵（ル09 02017. 1-2、第1冊、23、41カット目、許可：23-354号、令和5（2024）年1月18日）。文末に「郵便院長（ポストメーストル ゼネラル）」の記載がある。

- 「郵便創業談」『鴻爪痕』昭和30（1955）年改訂再販、前島会、514-515頁。前島が最初に出会った欧米の近代郵便の情報は、米国の産業、貿易、政治などを示した漢訳本『聯邦志略』であると記している。このほかに明治元（1870）年、福沢諭吉の『西洋事情』にも目を通したが、多忙な移動中に目を通したためか記憶になかったと振り返っている（前掲、『鴻爪痕』、518頁）。
- 1848年設立。1867年から太平洋を横断する（香港とサンフランシスコ間）定期船を就航。長崎、神戸、横浜を経由し、太平洋を航路として5隻の木造外輪船を主として月1ペースで定期運行した。（Pacific Mail Steamship Company [ed.], *A Sketch of the new route to China and Japan by the Pacific Mail Steamship Co.'s through line of steamships between New York, Yokohama and Hong Kong, via the Isthmus of Panama and San Francisco*, New York, 1867, Turnbull & Smith, p. 5.）
- 上野景範（1845-1888）、外交官、薩摩藩出身。13歳のとき長崎で蘭学を経て英学を学ぶ。前島密とは長崎、薩摩藩時代にも共通する点が多い。明治3（1870）年の渡欧時は25歳。（門田明芳・即正・久木田美枝子・橋口晋作・福井迪子監修「『上野景範履歴』翻刻編集』『鹿児島県立短期大学地域研究所研究年報』第11号、昭和57（1982）年、鹿児島県立短期大学地域研究所、<https://k-kentan.repo.nii.ac.jp/records/92>〔参照 令和6（2024）年1月10日〕）。

② 英国出張 往路について

(1) 前島密の出張の記録

前島密【図2】は明治3年6月2日(1870. 6. 30)に新式郵便の創業を建議した直後、鉄道敷設の資金調達の問題解決と新紙幣製造のため、6月17日(7. 15)、上野景範特命弁務使の副使として英国に出張する辞令が交付された⁽⁴⁾。当時の経緯について『鴻爪痕』の「追懐録」に記録がある。大隈重信談では、上野景範に付いて前島も出張、訴訟事件の傍らに郵便制度や紙幣の印刷などいろいろ研究してくるよう漠然とした命令を受けていた。そんな中で英国の郵便制度の状況を見て直ちに理解し、訴訟という本来業務の傍ら、郵便制度の研究を行った。それを日本で応用して現在の郵便制度の基をなしたのだ、と前島の応用力を生かした取り組みについて話している⁽⁵⁾。一方、渋沢栄一談では、「其時前島君も海外旅行を望んでゐて、一遍旅行したいと云うようなことから、前島君は附添役で行かれることになって」⁽⁶⁾と記憶しており、急な出張となったが、前島としては兼ねてから希望していた海外訪問の機会だったことが伺える。



【図2】前島密渡欧時代、35歳(WBB-11)

①前島密の記録

前島の渡欧に関する記述は、「自叙伝(鴻爪痕)」⁽⁷⁾「行き路のしるし」⁽⁸⁾「帝国郵便創業事務余談」⁽⁹⁾の3種の自叙伝に記載があるが、いずれも日付や船名に違いがある【表】。

辞令交付については、どの資料も同日で明治3年6月17日(1870. 7. 15)を示しているが、横浜出港日は3つとも異なる日付を指している。

船の名称について前島は、「行き路のしるし」で「支那号」(チャイナ号)としているが、太平洋郵船の定期船の運行記録⁽¹⁰⁾によればチャイナ号は前月の航行である。これは前島の誤認であり、乗船したのは「ジャパン号」【図3】が正しい。

No.	前島資料	横浜出航	船名	執筆時期
1	自叙伝(鴻爪痕)	明治3年6月24日(1870.7.22)	ジャパン号	大正3年(1914)~大正8年頃(1920)
2	行き路のしるし	明治3年6月28日(1870.7.26)	支那号	明治14年(1881)
3	帝国郵便創業事務余談	明治3年6月23日(1870.7.21)	記載なし	明治28年(1895) 雑誌「交通」掲載 明治32年(1899) 雑誌「太陽」掲載、 ※口述筆記、前島朱筆

【表】前島自叙伝に掲載された横浜出航日程

4 通信省編『通信事業史』第2編、昭和5(1930)年、通信協会、20頁。

5 前掲、『鴻爪痕』、602-603頁。

6 前掲、『鴻爪痕』、620-621頁。

7 前掲、『鴻爪痕』、18-83頁。

8 橋本輝夫監修「行き路のしるし」『行き路のしるし(前島生誕150年記念出版)』昭和61(1986)年、28-30頁(WAA-188)。前島本人の朱筆の入った原資料は「自叙伝『行き路のしるし』」(WAA-15)。

9 前掲、『行き路のしるし(前島生誕150年記念出版)』、80-81頁。「帝国郵便創業事務余談」は、『鴻爪痕』に掲載の「郵便創業談」(口語訳)の原本の原文を掲載。本稿は雑誌「交通」の史伝として明治28(1895)から翌年掲載。その後明治32(1899)年に雑誌「太陽」に掲載された談話の筆記に明治34(1899)年に前島が朱筆を加えたものが元になっている。原本は「帝国郵便創業事務余談」(WAA-28)明治34(1899)年、前島加筆原稿。



【図3】前島密と上野景範が乗船した「ジャパン号」
Pacific Mail Steam Ship Company's Steamer, Japan, 1868, priJHK 00354 Prints and Ephemera, Huntington Digital Library (<https://hdl.huntington.org/digital/collection/p9539coll1/id/12401>).

②上野景範の「日誌」との比較

上野景範【図4】が記した「日誌」⁽¹¹⁾(以下、「上野日誌」)【図5】には英国出張時の往路に関する詳細が残っている。

上野日誌によると6月17日(7. 15)、前島と同日に辞令交付があり、6月21日(7. 19)午後2時から伊藤博文のもとで前島密と面会、使節の事務などについておよそ3時間程度議論している。

横浜港に赴いたのは、6月23日(7. 21)。横浜出港は、6月24日(7. 22)正午、「郵便号ジャッパン号へ乗船」⁽¹²⁾とあり、「自叙伝(鴻爪痕)」の記載と同日、船名も同名である。

また、同行者に「カルゲル氏」という名前が記されているが、鉄道敷設問題(ネルソン・レイとの解約交渉)を担当したオリエンタル・バンクのウィリアム・カーギル⁽¹³⁾である。

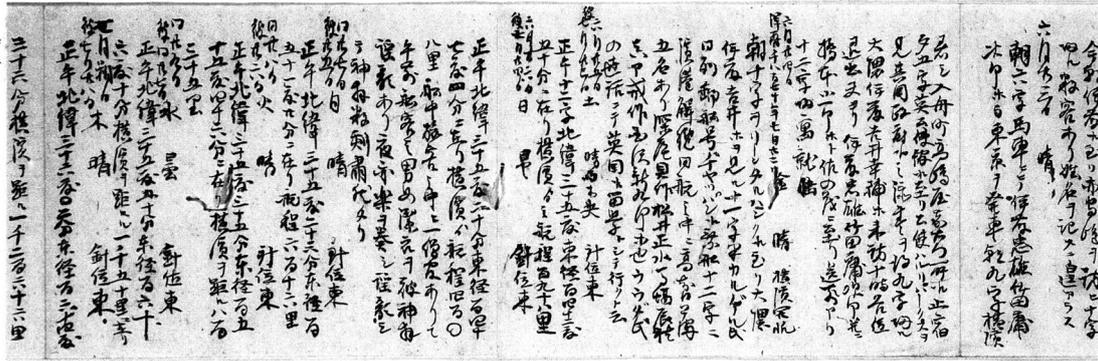
上野日誌は常に時刻や里程、誰に面会したかまで日々詳細に表している。日付は、和暦・西暦を併記しており、いずれの日付も正確であるため、内容に誤認がないものと考えられる。

一方で、前島資料はいずれもオンタイムの記録ではなく、後日記載したものや口述筆記による。特に日付はばらつきがあり、資料としての正確性にやや難があり、他の資料との検証が不可欠である。



【図4】上野景範肖像、国立国会図書館「近代日本人の肖像」(<http://www.ndl.go.jp/portrait>)

- 10 チャイナ号は1870年6月12日、ジャッパン号は翌月7月12日が香港を出る定期出港日。(藤村是清「太平洋郵船中国人ステアリッジ船客の統計的再検討(1867-1871)」アジア研究センター年報2014-2015『神奈川大学アジア・レビュー』Vol. 2、平成27〔2015〕年アジア研究センター、61頁)。実際の運航は、チャイナ号6月11日、ジャッパン号7月11日に香港を出港した。Japan Mail Office (ed.), *The Japan Weekly Mail: a Political, Commercial, and literary Journal*, Yokohama, June 25, 1870, p. 11. (参照復刻版Part 2, Vol. 1 No. 24/25, Edition Synapse-JP, 2010〔平成22〕年、343頁)
- 11 「上野景範関係文書」国立国会図書館憲政資料室寄託、「日誌」(R2-37)、1巻
- 12 吉元正幸「上野景範渡米日記」『鹿児島短期大学地域研究所研究年報』第14号、鹿児島短期大学地域研究所、14頁、<https://k-kentan.repo.nii.ac.jp/records/120> (参照 令和6〔2024〕年1月10日)。「上野日誌」翻刻は本稿を参照。
- 13 William Waiter Cargil (1784-1860)。林田治男「鉄道における日本側自主権の確立過程：レイ借款を中心に」『大阪産業大学経済論集』第7巻第2号、大阪産業大学学会、15頁。



【図5】「上野景範関係文書」のうち「日誌」部分（国立国会図書館憲政資料室寄託、R2-37、1巻、マイクロ複製、令和4（2023）年12月12日許可）

③英字新聞ジャパン・ウィークリー・メールの記録との比較

上野日誌の内容を裏付けるものとして、ジャパン・ウィークリー・メール（The Japan Weekly Mail.以下、「JWM」）、1870年7月23日号の横浜港の船舶情報と乗船者名簿を確認した。

ARRIVALS.

July 19, *Japan*, Am. Str., Freeman, 3,500, from Hongkong, Mails & c., to P.M.S.S Company.

DEPARTURES.

July 22, *Japan*, Am. Str., Freeman, 4,000, for San Francisco, Mails & c., despatched by P.M.S.S Company.

PASSENGERS.

Per *Japan*, for San Francisco:—Mr. and Mrs. Cargill and servant, Mr. and Mrs. Lowder and child, Mr. and Mrs. Hawke, J. Ravel, N.W. Reisenga, U.S.N., A. Sigrist, D. Randien, J. Bauduin, J. Albinson, G.G. Lowder, J. Busch, Blydenburgh, 7 Japanese Officers, and 13 Europeans and 2 Japanese in the steerage. (14)

上記によれば、ジャパン号は明治3年6月21日（1870. 7. 19）に香港から横浜に入港し、6月24日（7. 22）にサンフランシスコに向けて出発している。搭乗者名簿の欄には、「カーギル夫妻と使用人、日本人官吏7名、三等客室日本人2名」の記載がある。上野・前島両名の記載はないが、「日本人官吏7名」に注目したい。国沢新九郎に関する資料（以下、「国沢資料」）⁽¹⁵⁾の記載から、この便で高知藩留学生5名（真辺戒作、松井正水、深尾具作、馬場辰猪、国沢新九郎）が乗船していることが判明しており、日本人官吏7名とは、留学生5名と上野景範と前島密を合わせた人数であると考えられる。

また、横浜出港日については国沢資料と、JWMの情報と組み合わせると、上野日誌の6月24日（7. 22）と合致する。

14 明治3（1870）年1月22日、横浜で創刊された英字新聞で“Shipping Intelligence”欄に横浜港に関する船舶情報が掲載されている（Japan Mail Office [ed.], loc. cit., p. 11.）。下線は筆者加筆。
15 三輪英夫「国沢新九郎の画歴と作品」『美術研究』第321号、東京文化財研究所、昭和57（1982）年、174頁。国沢新九郎（1848-1877）、土佐藩出身、洋画家。洋画家として知られるが、このときは法律学などを学ぶためジャパン号で米国を経由し英国に派遣された。

(2) 杉浦譲への「消印」に関する連絡はいつか？

前島は、渡欧前は消印についての知識がなくジャパン号の船内で初めて知り、太平洋航行中に船内郵便局から杉浦譲に急ぎ知らせたことを「帝国郵便創業事務余談」に記している。

此汽船は米政府の郵便物を 東洋に運送するを以て本旨とし 之が為め同国政府より 毎年五十万弗宛を補給せられ居るものならんとは 余が其事を知りたるは横浜を發したるより十日許の跡なりし この日甲板上に掲示アリ 其要に曰く 本船は明何日を以て桑湊 (サンフランシスコ) 發本社船と洋上に行き逢うべし… (中略) 此時切手再用を防ぐ為め 消印をなすことをも知りたければ直ちに其次第を認め 同便を以て杉浦駅逋權正に報道したり⁽¹⁶⁾

このことから、消印について杉浦に郵便で知らせたことがわかるが、郵便創業の準備で多忙な杉浦のもとにこの知らせが届いたのはいつだろうか？

① 「帝国郵便創業事務余談」の記載

横浜を出港して10日余り後に…とあり、換算すると7月上旬（8月上旬）頃に横浜港に向かう船に行き交ったものと考えられるが、前島の手記だけでは正確な日付はわからない。

② 上野日誌の記載

一方、上野日誌には日々の細々とした記載があり、手紙に関する情報は3回ほど登場する。そのうち、2回は以下に引用した太平洋上でのことである。

同十日 土 晴 針位東

彼同六日

正午北緯三十六度三十四分西経百五十度三十四分、距横浜三千四百四十一里、不日横浜江至ル郵船ニ可逢ニ付、家郷江之書ヲ認ム、

同十二日 月 曇 針位東

彼同八日

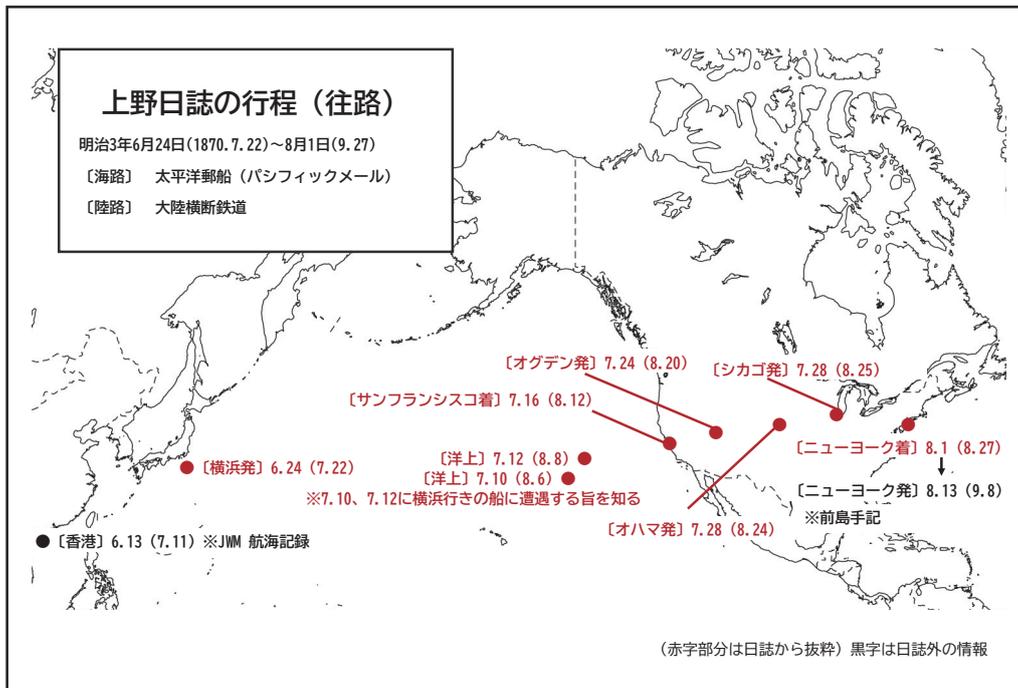
正午北緯三十七度〇六分西経百四十一度三十八分、距横浜三千八百七十一里ニ在リ、今仏曉横江至ル同社之郵船号「ゲレートポブリッキ」江逢ヒ、大隈・伊藤・吉井江之公書并ニ親友等江之書状ヲ托ス、渺茫タル大洋中ニ其航路ヲ不誤航海術之妙手ヲ得ルト云可シ、⁽¹⁷⁾

上野日誌によれば、7月10日（8. 6）の記録に近日横浜行きの船に遭遇すると記されており、その2日後の7月12日（8. 8）【図6】の早朝に横浜に向かう太平洋郵船の船に行き交っている。前島の「10日余り後」という記載にほぼ同じ時期と判断でき、この便で杉浦宛の郵便が投函されたものと考えられる。

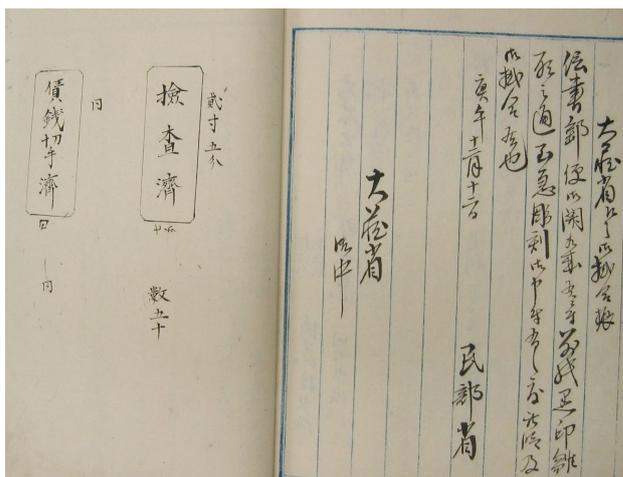
併せてJWMの船の運航記録とも照合したところ、この時期に横浜に入港した船舶は、サクセス号（Success、サンフランシスコ発1870. 8. 1、横浜着8. 14）⁽¹⁸⁾とグレート・リパブリック

16 前掲、『行き路のしるし（前島生誕150年記念出版）』、81頁。下線および（中略）は著者加筆。

17 前掲、吉元、41-42頁。



【図6】上野日誌の行程（往路）



【図7】消印の仕様等「明治三年 正院本省郵便決議簿」
(BAA-1)



【図8】「賃銭切手済」明治4(1871)年、袋井資料(9000-0023-16)

ク号 (Great Republic、サンフランシスコ発未記載、横浜着1870. 8. 26)⁽¹⁹⁾がある。このことから上野日誌にある郵船号「ゲレートポブリッキ」は、グレート・リパブリック号であることがわかった。

このほかに、アメリカ号 (America、サンフランシスコ発未記載、横浜着7. 24)⁽²⁰⁾も航行しているが、アメリカ号とジャパン号が行き会うタイミングはジャパン号出港の翌日あたりとなり、前島の10日余り後という表記とも合致せず、上野日誌にも掲載がない。アメリカ号の航海

18 サクセス号は204トンで船会社は“Kirby & Co.” Japan Mail Office (ed.), *The Japan Weekly Mail: a Political, Commercial, and literary Journal*, Yokohama, Aug. 20, 1870, p. 11. (参照 復刻版Part 2, Vol. 1 No. 24/50, Edition Synapse-JP-, 2010 [平成22]年、393頁)。

19 グレート・リパブリック号は4,000トンで船会社は太平洋郵船。Japan Mail Office (ed.), *The Japan Weekly Mail: a Political, Commercial, and literary Journal*, Yokohama, Aug. 27, 1870, p. 11. (参照 復刻版Part 2, Vol. 1 No. 24/25, Edition Synapse-JP-, 2010 [平成22]年、405頁)。

記録では、チャイナ号と行き交う旨の記載があるが、ジャパン号の記載がないという理由から本稿では可能性として除外した。

これらの検証から前島の手紙が横浜に到着したのは、グレート・リパブリック号だとすれば7月30日（8. 26）となる。横浜の米国在外郵便局の処理を経て、東京の杉浦の手に届けられたのは、早くても8月初旬（9月初旬）だったと考えられる。そこから大至急で消印の仕様や製作元などを検討。当館収蔵の「明治三年 正院本省 郵便決議簿」の「第22 注 郵便検査印」【図7・8】に12月8日（同月12日達）⁽²¹⁾とあるので、前島の連絡から約5カ月後に決裁となったことが伺える。

③ 米国到着 大陸横断

上野日誌によれば、サンフランシスコには、7月16日（8. 12）午後1時に着岸。その後は、前年に開通した大陸横断鉄道を利用して約半月かけ、英国行きの港があるニューヨークに、8月1日（8. 27）に到着している。

同じ行程で欧州へ向かったのは同年に出発した岩倉使節団に例がある。大陸横断鉄道の開通以前は海路、陸路（鉄道）でパナマを経由する便でさらに時間を要した旅となった⁽²²⁾。

この米国での大陸横断の日程については、前島密から渋沢栄一と杉浦譲に宛てた手紙の中に記載があったことが、杉浦の日記「つゝれきぬ（二）」⁽²³⁾に記されている。この手紙は、10月7日（10. 31）に渋沢栄一と横浜に馬車で出かけ英国人と面会、その翌日10月8日（11. 1）に同地で受け取ったものである。

十月八日 雨

（中略）

一 西浜氏より達亜行前島氏寄書、渋沢氏兩名本月一日達

亜米利加云、如左

各位清勝奉職奉祝賀候、陳者小生無異米国之中心鉄道ニ而横截り、愉快之行旅を本月朔日ニ終り、同国ニューヨーク着仕候、カルゲル氏之都合ニ寄無抛同地滞留旬日ニ及び、漸本日当港出帆英国江相向ひ候

（中略）

一 ロントン着之上精しく申上候へ共、先現下之不安可申上如此、草々万々頓首

庚午八月十三日 前島 密拜

渋沢篤太夫

先生

杉浦 愛蔵

足下

20 アメリカ号は4,000トンで船会社は太平洋郵船。Japan Mail Office (ed.), *The Japan Weekly Mail: a Political, Commercial, and literary Journal*, Yokohama, July 30, 1870, p. 15. (参照 復刻版Part 2, Vol. 1 No. 24/25, Edition Synapse-JP, 2010〔平成22〕年、405頁)。

21 「明治三年 正院本省 郵便決議簿」第一部、明治3（1870）年、駅通寮、巻末、(BAA-1)。

22 Pacific Mail Steamship Company (ed.), loc. cit., p4.

23 土屋喬雄編『杉浦譲全集』第3巻、昭和53（1978）年、杉浦全集刊行会、65-66頁。引用で筆者が省略した箇所は（中略）とした。下線は筆者加筆。

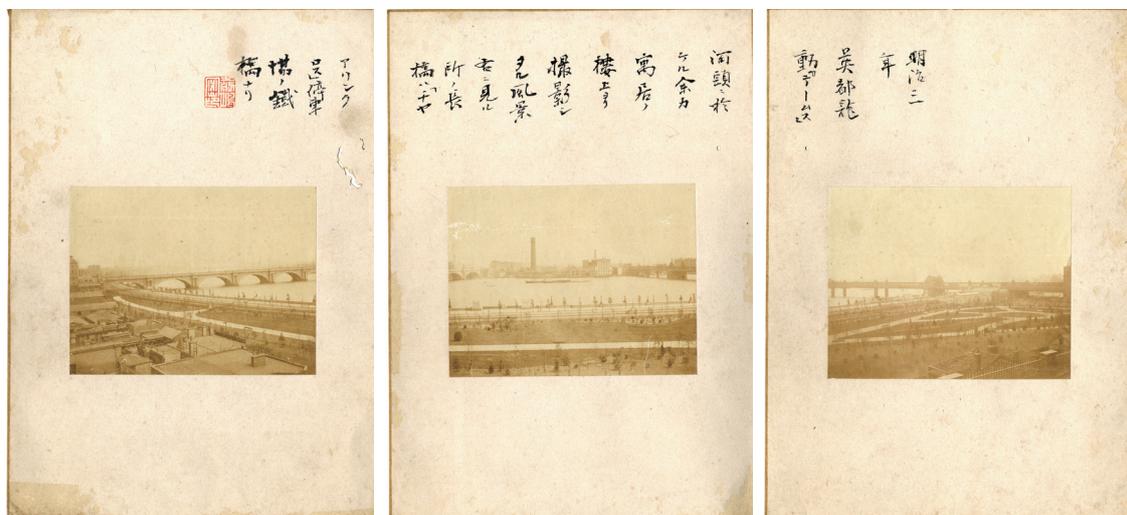
この前島の手紙によると、ニューヨークに到着したのは上野日誌と同じく、8月1日(8.27)、英国に出港したのは、(上野日誌の最終日は8月7日で記載なし)8月13日(9.8)であることがわかる。

当時、ニューヨークから英国(リバプール又はサウサンプトン)までは約11日⁽²⁴⁾かかったので、英国到着は8月末(9月末)頃だっただろう。英国着の行程については、国沢資料によれば、「パシフィック・メール号で横浜を出航、米国を經由し9月末英国へ着いた」⁽²⁵⁾とあり、間違いないことが判明した。

4 英国滞在

英国滞在について、前島の手記には、これまでの往路の情報と同じく詳細な日付の付記がほぼないが、滞在(別途紙幣製造の関係などで欧州を移動)中に郵便事情など多くのことを学んでいる。

英国では、同年代の夫妻が営む下宿⁽²⁶⁾に長く逗留したことがわかっており、そこから中央郵便局などに通い調査を進めたようである。【図9】は下宿先からではなく、前島が英国ロンドンに到着後に仮住まいの宿の屋上から撮影させたもので、テムズ川をはさみ、遠望に近代的な工場、手前には市民の憩いの空間である公園(Victoria Embankment Gardens)、向かって右手にチャリングクロス駅とハンガーフォード橋、左手にウォータールー橋が並んでいる。郵便のほか鉄道敷設や交通など近代化のインフラ整備に関わっていた前島の興味を伝える一枚だろう。



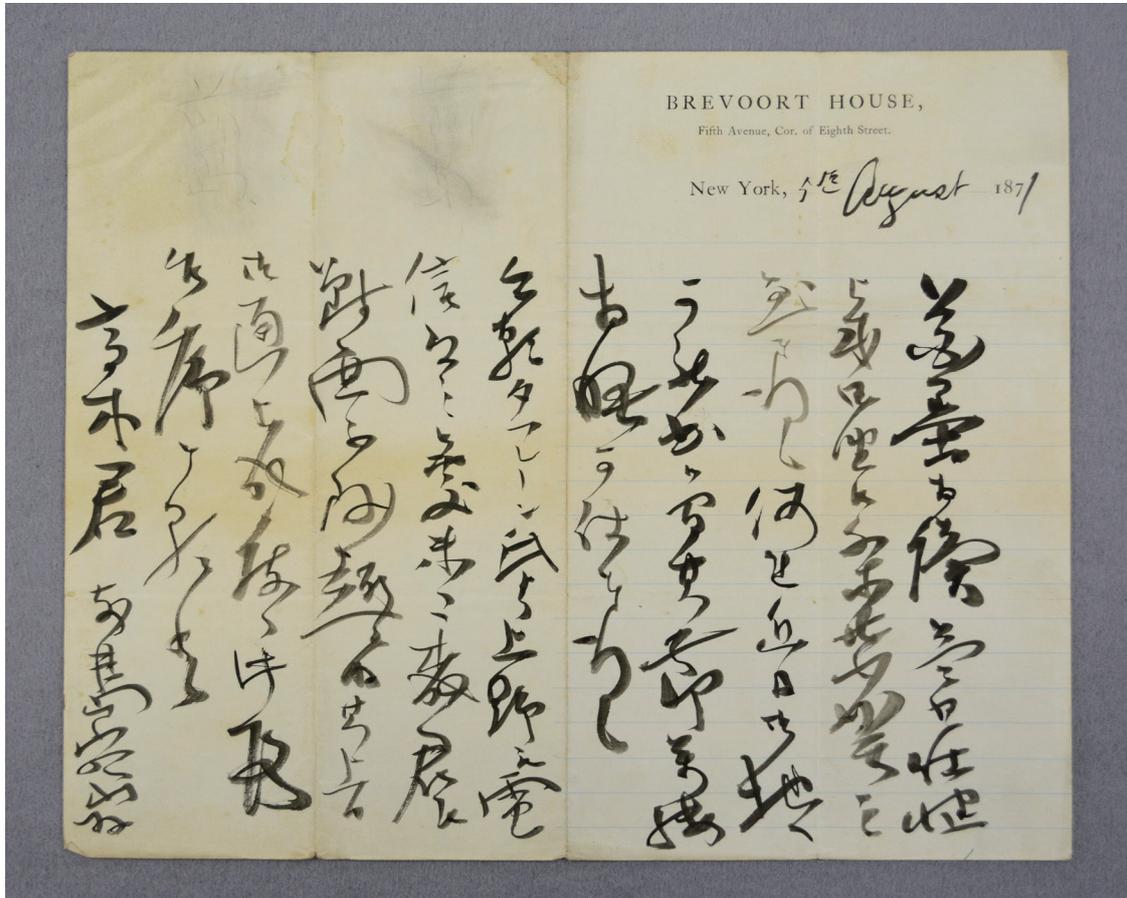
【図9】〔写真〕「英都龍動『テームス』『チャアリンクロス停車場』の全景」(8101-1038)。前島自筆の賛には、「明治三年/英都龍動『テームス』河頭ニ於ケル余ガ寓居ノ樓上ヨリ撮影シタル風景/右ニ見ル所ノ長橋ハ『チャアリンクロス』停車場の鐵橋ナリ」と記されている。

24 前掲、Pacific Mail Steamship Company (ed.), loc. cit., pp. 4-17.

25 前掲、三輪、174頁。

26 投宿先は、ケンジントン地区のノッティングヒル・ラドブローク通り33番地。(星名定雄『情報と通信の文化史』平成16〔2006〕年、法政大学出版局、125頁)。マルトビー夫妻宅で前島密は2名の日本人の留学生と同居していた(菊地勇治「前島密の英国滞在時の住民票」『郵便史研究』第39号、平成27〔2015〕年、郵便史研究会、47-48頁)。

帰国については「行き路のしるし」に「斯クテ明治四年五月〈ニ至リ〉ノ下旬本務モ既ニ了タレハ 帰朝スヘシト決シタリ（中略）〈其年ノ〉同月倫敦ヲ出発シ」とあることから5月下旬に帰国の連絡があり、同月中にロンドン出発、往路と同じ行程を戻り、ニューヨーク【図10】から大陸横断鉄道を経てサンフランシスコへ。ジャパン号で帰国の途についている。



【図10】 明治4年6月19日（1871. 8. 5）に前島密がニューヨークで滞在したホテル“BREVOORT HOUSE”（5th Av. 8th St.）の便せんで作成した手紙（8101-548）

5 横浜到着日の記録

帰路については、上野日誌、前島資料ともに詳細がない。到着日については資料が複数残っているが、それぞれの記録に微妙な日付のずれがある。

(1) 「上野景範履歴」

明治4年8月12日（1870. 9. 26） 帰朝⁽²⁷⁾

(2) 前島資料

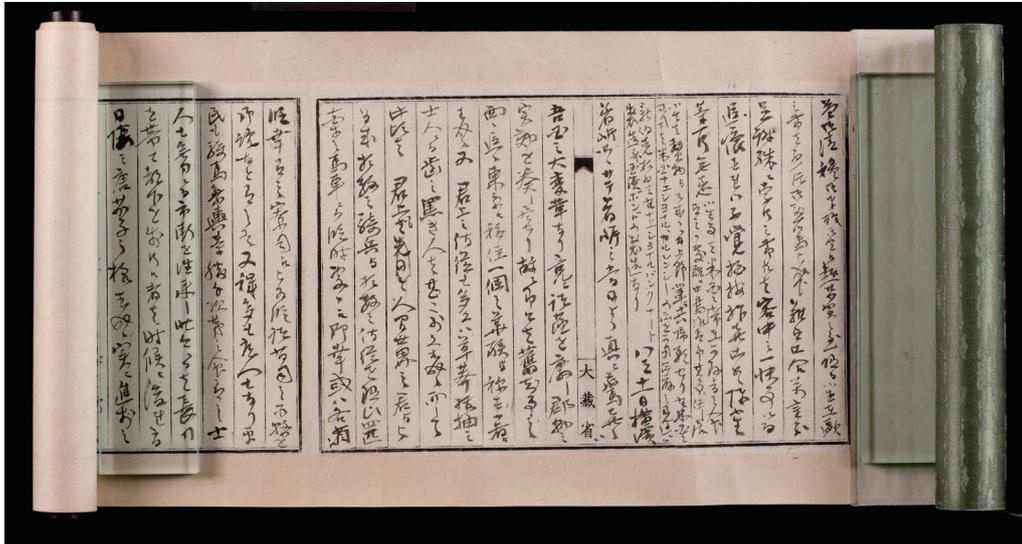
① 「鴻爪痕」

明治4年8月15日帰朝す⁽²⁸⁾

27 前掲、『上野景範』翻刻編集、14頁。

28 前掲、『鴻爪痕』、523頁。

- ② 「行き路のしるし」
「〈其年ノ〉同月倫敦ヲ出発シ踰テ八月十五日恙無クシテ帰京シテケリ」⁽²⁹⁾
- ③ 鮫島誠蔵・塩田三郎宛書簡（以下、「鮫島宛書簡」）【図11】
「八月十一日横浜着岸つかまつり候」⁽³⁰⁾



【図11】「前島密自筆書簡（2通軸装）鮫島誠蔵及び塩田三郎宛」明治4（1871）年10月1日（WBA-5-5）

(3) ジャパン・ウィークリー・メールの到着記録

1871年9月30日号のJWMでは、

ARRIVALS.

Sept. 25, *Japan*, Am. Steamer., Freeman, 4,352, from San Francisco, September 1st, Mails & General, to P.M.S.S Co.

DEPARTURES.

Sept. 26, *Japan*, Am. Str., Freeman, 4,352, for Hong Kong, Mails and General, despatched by P.M.S.S. Company.

PASSENGERS.

Per *Japan*, from San Francisco. For Yokohama:—Marcu Flowers wife Inft, and servant, H. Wilson wife and Inft., Wm. Wilson and wife, Mrs. L.F. Glackmeyer, Messrs. O. and G. Glackmeyer, M. Kaga, M. Arey, John McDonald, A. Fabre, S. Cassenerri, Henry L' elegrino, Miss Lizzie M. Kleim, C.W. Lawrence, M.M. Scott, H. Mayeshima, K.S. Wooyeno, friend and 2 S'ts.⁽³¹⁾

ジャパン号は、明治4年7月17日（1871. 9. 1）にサンフランシスコを出港し、8月11日（9.

29 前掲、『行き路のしるし（前島生誕150年記念出版）』、31頁。

30 鮫島宛書簡。7、8行目に「八月十一日横浜着」と記されている。

31 Japan Mail Office, *The Japan Weekly Mail; a Political, Commercial, and literary Journal*, Yokohama, Sep. 30, 1871, p. 12. (参照 復刻版Part 3, Vol. 2 No. 1/25, Edition Synapse-JP-, 2010 [平成22]年、558頁)。

25) に横浜に入港。香港に出港したのは翌日の9月26日である。乗船名簿には、「K.S. Wooyeno」
「H. Maeshima」両名の氏名が明記されており、両名が搭乗していたのは明確である。

JWMの運行記録との照合により、前島資料の到着日表記で正しいものは、前掲の鮫島宛書簡の明治4年8月11日(1871. 9. 25)であることがわかる。

6 さいごに

前島密に関する自叙伝に記載された横浜港の出入港日の記録と上野日誌、太平洋郵船の運行記録との比較検証結果から、3件の日程が明らかになった。

1件目は往路について。横浜出港は明治3年6月24日(1870. 7. 22)であることが判明した。これまで発行された前島関連書籍内では、往路の横浜出港日は主に「自叙伝(鴻爪痕)」に記載のある6月24日⁽³²⁾、次いで「行き路のしるし」の6月28日⁽³³⁾の2種の掲載があり、どちらが正しいのか不正確だったが、本稿の検証により前者であることを特定することができた。

2件目は復路について。横浜入港日は、鮫島宛書簡とJWMの記録を比較した井上卓朗氏の先行研究があるが、明治4年8月11日(1871. 9. 30)であることを再確認した⁽³⁴⁾。

3件目は、これまで不明瞭だった前島から杉浦に宛てた消印製作に関する連絡の時期である。前島が太平洋上で手紙を投函したのは、グレート・リパブリック号であり、杉浦の手元に渡った時期は、同船が横浜に入港した明治3年7月30日(1870. 8. 26)以降、明治3年8月初旬(1870. 9. 初旬)ごろであったことを裏付けるものとなった。

本稿では横浜・サンフランシスコ間を中心に検証したが、米国から英国までの大西洋航路、英国・欧州滞在の情報の分析は未着手であり、不明な点が多い。

前島密の帰国後の取り組みについて、渡欧時のいつ、どこで、どのように出会ったのか、何に影響を受けたのか、どのように応用したのか——。当館の前島洋行記録と今回取り上げた上野日誌、国沢資料といった同時代資料の調査との比較検証をとおして、今後新たな発見につながることを期待したい。

〔凡例〕

- 1 引用文献の年月日の混同を避けるため、和暦を基本とし、() に西暦を記した。
- 2 資料名称は「」、資料番号は() に記した。
- 3 収蔵先の表記がないものは郵政博物館の収蔵品とした。

(いむら えみ 郵政博物館主席学芸員)

32 井上卓朗『前島密=創業の精神の業績』平成29(2017)年、鳴美。38頁では明治3年6月28日、一方で148頁では明治3年6月24日(1870.7.26)、帰国日は明治4年8月11日(1871.9.25)。

33 井上卓朗・星名定雄『創業150年 増補 郵便の歴史—飛脚と郵便150年の歩みを語る—』令和3(2021)年、鳴美。同書では往路は、67頁に「明治3年6月」のみ記載、70頁で復路は8月11日としている。

34 復路に関する先行研究として井上論文に詳細があり、鮫島宛書簡、JWMとの比較研究により8月11日と確定している。(井上卓朗「ていばーく(逓信総合博物館)資料紹介(4)」『郵便史研究』第20号、平成17〔2005〕年、73-75頁。)